

文語歌曲 「野薔薇」

谷田貝常夫

(作詞 W・ゲーテ 作曲 ウエルナー)

ゲーテ作詞、ウエルナー作曲になる「野薔薇」なる唱歌、日本にて紹介せられたるは明治十六年、音楽取調掛譯、合唱曲《花鳥》なる由なれど、この譯詩は原詩とはほど遠きものにて、6／8拍子に對し、8句と7句にて對應させたため、ほとんど歌はるゝことなくて了はる。實はこの原詩は、ゲーテの戀愛とその別れを詠みたるものと伝へられ、明治のこの時代にては、唱歌に戀愛は御法度なれば、直譯避けたるがためとせらる。そもそも獨逸にても、元々から類似の歌詞あり、ゲーテ、これを取りて己の戀になぞらへ、"Sah ein Knab' ein Roslein stehn..."と仕上げたるものとせられ、獨逸民謡の一つと看做さるるに至れりとの由。更に、作曲も、シューベルトを含め數多くありたるものの中に、十九世紀はじめ、作曲家ウエルナー自身の合唱團指揮により初演せられたところ、大なる評判を得、今に至るまでこのメロディーにて世界的に愛せらさることなれり。

ゲーテの「野薔薇」の日本語譯にては、森鷗外譯嚆矢とせらるるも、明治も四十年代になりて近藤朔風の譯したる歌詞、これも二種あれど、左に載するが生き残りて昭和になりて教科書に採用せられたり。

一、 童は見たり、野なかの薔薇。／清らに咲ける、その色愛でつ、
飽かずながむ。紅にほふ、／野なかの薔薇。

二、 手折りて往かん、野なかの薔薇。／手折らば手折れ、思出ぐさに、
君を刺さん。紅にほふ、／野なかの薔薇。

三、 童は折りぬ、野なかの薔薇。／折られてあはれ、清らの色香、
永久にあせぬ。紅にほふ、野なかの薔薇。

この近藤譯、7句と6句にて纏められたれば、歌詞の内容と共にメロディーも原作に合致するものとなり、長く日本人に馴染まれたる唱歌となれり。

明治三十六年、東京音樂學校や東京帝國大學の學生達が、日本人最初の歌劇を上演せんと企畫し、グルックの「オルフェウス」(日本の黄泉比良坂傳説に似る)を撰びし時、近藤朔風は他二人と共にその譯詩を擔當し、日本語にて上演せられたり。その折、學校のオーケストラを使用することを得ず、當時東京帝大にて哲學などを講じたりしフォン・ケーベル、ピアノにて伴奏せり。(夏目漱石に「ケーベル先生」なる一文あり。「それほど西洋が好いとは思はない、しかし日本には演奏会と芝居と圖書館と畫館がないのが困る、それだけが不便だと云はれた。」)

その後大正三年、グルックの生誕二百年を記念して本居長世、この「オルフェオとエウリディーチェ」のオーケストラ伴奏による日本語上演を企て、森鷗外に翻譯を依頼せり。鷗外は留學中に獨逸にてこのオペラを観てをり、己れの藏書臺本を使つて翻譯せるが、今回の樂譜には合はざれば、本居から樂譜を借りて改めて譯し直せど、當然、上演には間にあはざりき。その改譯は「オルフェウス第二譯稿」と呼ばれ、全集などには載せられたり。その鷗外自筆原稿が平成十九年、永青文庫にて公開せられたる経緯は、「新発見の森鷗外直筆の「オルフェウス」第二譯稿をめぐつて 瀧井敬子」に詳説せらる。黒ペン書きの獨逸語歌詞の上に、赤ペンの日本語譯が縦書きせられたる寫眞、モノクロームなれど載せられたれば、鷗外の辛苦のほど偲ばれ、胸を搏つ。

鷗外譯の臺本による上演

は平成十七年に初演せられ、數年前にも再演せらる。

始めてオルフォイスを譯せし近藤朔風、樂譜の下に翻譯文字置いたるか、如何なる作業したるかに興

味を覺ゆ。この原文、原音符に忠實なる譯者、『シヨスランの子守歌』、シューマン曲の『流浪の民』、シューベルト曲の『菩提樹』等々、曲の流れに合せて四十七篇を譯出せるも、『ローレライ』は、出だしの「なじかは知らねど」のイントネーションに日本語の無理感じられ、この歌愛好者多ければ、それなりの日本語の歪みも流布したらん、歌詞譯出の難しさ實感せらる。

(平成二十九年七月六日受附)